



## 男子学生の母性看護実習に伴う経験

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川村, 千恵子, 井端, 美奈子, 田原, 町子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00010801">https://doi.org/10.24729/00010801</a>

原 著

## 男子学生の母性看護実習に伴う経験

川村千恵子<sup>1)</sup>, 井端美奈子<sup>2)</sup>, 田原町子<sup>1),\*)</sup>

(<sup>1)</sup>大阪府立看護大学医療技術短期大学部看護学科, <sup>2)</sup>大阪府立看護大学看護学部)

### Experiences of Male Nursing Students during Clinical Training in Maternal Nursing

Chieko Kawamura<sup>1)</sup>, Minako Ibata<sup>2)</sup> and Machiko Tahara<sup>1),\*)</sup>

(<sup>1)</sup>Department of Nursing, Osaka Prefecture College of Health Sciences and

<sup>2)</sup>Department of Nursing, Osaka Prefecture College of Nursing)

The purpose of this study was to explore experiences of male nursing students. Content analysis was used as the study methodology. Data were collected from questionnaires and semi-structured interviews with 5 male nursing students before and after clinical training in Maternal Nursing. Five core categories were extracted before and after the clinical training, and one category was extracted afterwards. The five categories were as follows: fear of an accident happening and disturbance in learning, self efforts for adaptation for learning, effort for adaptation to the environmental mood, positive meaning caused by the student's gender, and checking the experience through his own feeling and reality. The one category extracted after the clinical training was a feeling of respect for life. These results indicate that:

- 1) Nursing course teachers have to listen carefully to male students about their feelings as well as female students;
- 2) It is essential for students to develop an empathic understanding for what they have never experienced, like pregnancy and childbirth;
- 3) Family-centered care, not only for mother and baby but also for husband or partner, is a core of an obstetric nursing unit; and
- 4) It is necessary to understand the differences of feelings between male and female students in clinical education of Maternal Nursing.

**Key words:** male nursing students; experience; clinical training in maternal nursing; gender differences

#### 1. 研究目的

日本の男性看護師は平成12年度調査で看護師の4%にすぎず、看護基礎教育課程(3年課程)の入学者のうち男性の割合は6.7%にとどまっている<sup>1)</sup>。男性看護師の歴史は「救助人」に始まり、昭和43年に保健婦助産婦看護婦法の一部改正によって「看護師」として名称が定められた。当時の看護の基礎教育課程においては、男子学生の母性看護実習は成人看護実習と読み替えが可能とされており、母性看護実習を経験せずに卒業できていた。しかし、平成元年の保健婦助産婦看護婦学校養

成所指定規則の一部を改正する省令で、初めて看護の基礎教育が男女同様の内容となった。

本学の前身である大阪府立看護短期大学は、昭和53年に開校し、看護学実習を開始した昭和55年度から男子学生の母性看護実習を行い、実習病院の協力を得、比較的問題なく運営してきた<sup>2)</sup>。しかし、国民の権利意識が高まっている現在、医療や出産現場の変化に伴い、医療を受ける女性やその家族の意識も変化している。特に、平成10年男女参画基本計画が我が国の政策として明記されたことにより、平成12年から男性助産士について国会で審議され、我々専門職者のみならず、女性やその家族を巻き込んだ社会的論議に発展している。そのような社会状況の中で、男子看護学生は母性看護実習に臨んでいる。一方、教員は妊産褥婦からの男子学生の受け入れの悪さを年々感じながら実習指導を行い、男子学生の苦慮する

\*) 非常勤講師

連絡者: 川村千恵子

(受付日 2003年9月30日, 受理日 2004年1月15日)

様子も感じているが、学生が経験していることを断片的に理解しているのみである。

男子看護学生の母性看護実習に関する先行研究では、実習の運営方法に関する検討<sup>3-6)</sup>、男子学生の実習に対する自身の認識<sup>7-10)</sup>、男子学生の実習に対する教員、スタッフ、看護学生、褥婦などの認識<sup>11-14)</sup>、在学生と卒業生の調査による教育効果<sup>2)</sup>などがある。また、看護教育の中での男子学生(在学生)の経験・認識<sup>15)</sup>、男子学生(卒業生)の卒業要件充足のための包括的な学習経験<sup>16)</sup>、海外での男子看護学生の現状<sup>17)</sup>、教育機関からみた男子看護学生の教育の実態<sup>18)</sup>などが明らかにされている。これらは、すでに終えた実習をもとに研究されたものであり、母性看護実習前後の男子学生の経験を継続的に調査されたものではない。そして、男子看護学生の母性看護実習の経験を全体としてとらえたものはない。

そこで、母性看護実習(以下、実習)において男子学生が実習前後にどのような心理的な経験をしているのかを知り、教育上の示唆を得ることを目的に研究を行った。

なお、ここで経験(Experience)とは、実習に関して見たり、聞いたり、学習したり、あるいは情動的な刺激を与えられたりするような、学生の知的機能と情意的機能によって把握されている総体<sup>19)</sup>とした。

## II. 方 法

### 1. 研究対象

3年課程看護学科3年次生の男子学生で、研究対象者5名のうち研究協力が得られた男子学生5名全てである。

### 2. 研究方法

実習前のオリエンテーション終了後(オリエンテーション当日)と実習終了後(実習記録提出日)の計2回、学生へ質問紙調査および半構成的面接調査を行った。調査日は、他領域の実習の影響が少なくなるよう設定した。質問紙はThe Face Scale<sup>20)</sup>を用いて、現在の気分(mood)を調査した。The Face Scale(図1)は、快から不快までの感情を20段階で評価でき、その評価が簡便で短時間でできるメリットがあり採用した。質問紙を用いて、「あなたの現在の気持ちに近い顔の表情をチェックして下さい。」と声かけし、本人にその場でチェックしてもらった。評価は1点から20点で表され、点数が少ない方が快、多い方が不快とされている。面接では、実習前後に現在の気持ち、実習後にはpositiveな影響とnegativeな影響を表現してもらうことを中心とした想起を行ってもらった。「実習が終わって今、どんな感じですか。」「実習で良かったことはどんなことですか。」「男子学生ということで、

やりにくかったことはありますか。」など問いかけ、そこから返ってきた内容を深める形で質問を進めた。「経験」は情意的機能を有するため、両極の感情に伴う影響(出来事や事柄)を表現してもらうことにした。質問紙と面接の2方法から現在の気持ちを調査した理由は、面接前に、言語表現できる前の曖昧な感情すなわち気分(mood)を簡便な質問紙法で導入のためである。次いでそのデータを元にその気持ちを面接により「今のそのような気持ちは、言葉で表現するとどんな感じですか。」と言語化することで明確にしようとした。

### 3. 倫理的配慮

学生に対し研究への不参加、面接内容によって学生が成績判定上不利益を被ることは一切ないことを説明し、学生の自由意志による承諾を得た。また、調査は実習指導に直接関係しない研究者が行った。調査は個室の研究室で行い、回答の拒否も自由であることを伝えた。

### 4. 分析方法

対象の承諾が得られた場合の面接内容は、テープレコーダに録音し、逐語録を元に分析を行った。研究者で逐語録を繰り返し読み、データの内容を再確認した。データ内で学生の語った部分を文章または区切りと考えられる内容で分け、文脈等で検討しながらコード化した。コードを類似する内容にまとめ、2段階で抽象化し、最終カテゴリーを抽出した。まとまりのあるコードに分析内

INSTRUCTIONS: The face below go from very happy at the top to very sad at the bottom. Check the face which best shows the way you have felt inside today.

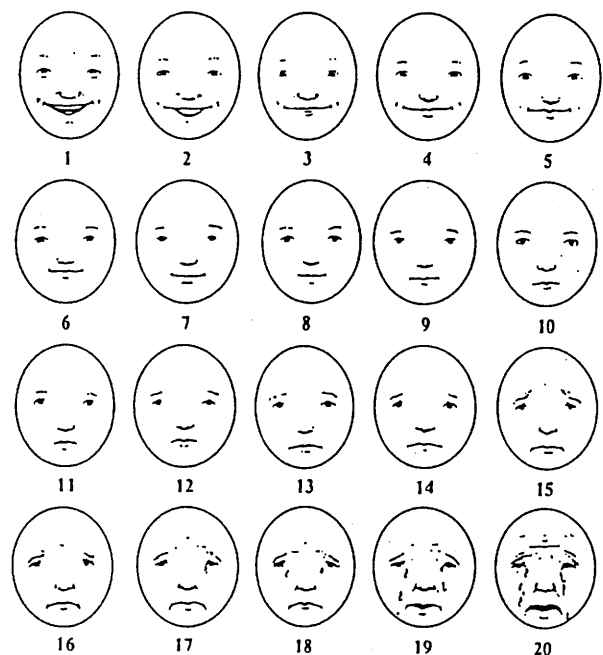


図1 The Face Scale.<sup>20)</sup>

容の意味を表す名称を付け、カテゴリーとした。研究者間で合意が得られるまで検討し、その後、データ分析の結果を臨床心理分野の質的研究の経験者に評価指導(スーパービジョン)を受け、信頼性の確保に努めた。

### 5. 研究期間

平成14年5月29日から平成14年12月4日までである。

## III. 結 果

面接時間は平均35.2分で最短20分、最長90分であった。5名の学生の平均年齢は、23.2歳で最高33歳、最少20歳であった。

実習前後のThe Face Scale 得点の変化は、図2に示す通りである。いずれの結果も実習後の感情は快の方向へ向いていた。しかし、受持事例から拒否された経験をもつ学生(C, E)は、実習前後の変化量が少なかった。

面接からの男子学生の実習前の経験は、5つのカテ

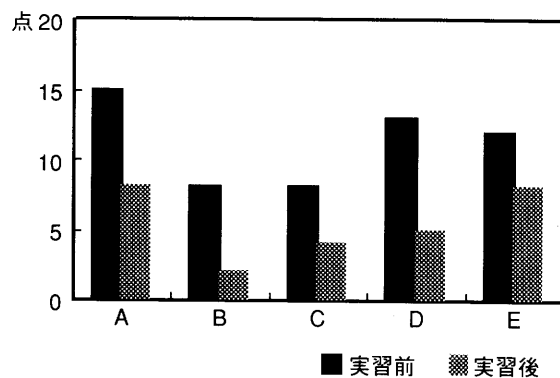


図2 男子学生の実習前後のThe Face Scale 得点の変化

グリーが抽出され、その下位に10のサブカテゴリーと108のコード(最高34コード, 最少10コード)、実習後の経験は6つのカテゴリーが抽出され、その下位に15のサブカテゴリーと132のコード(最高36コード, 最少10コード)が抽出できた。サブカテゴリーのうち二つは実習前、実習後で同一であった。(表1)

### 1. 実習前の経験から抽出された5つのカテゴリー

#### (1) 学習適応のための自己の取り組み・順応

このカテゴリーは、卒業・免許取得のための学習意欲や、学習適応のために自ら適応しようとする行動、看護技術を習得した時に得られる実感などを示している。母性看護実習は「不安」、「できればやりたくない」けれど、必修科目なので「やらないといけない」という認知的側面での理解や「やり抜く覚悟はできている」といった精神運動的側面での覚悟が挙げられていた。「将来の就職する専門分野に直結しないので、女性の看護を学びたい」や「自分のわからない部分だから他に比べて真剣に講義を聞いた」など学習の動機付けがなされていたり、すでに実習を終えた男子学生から事前に情報収集するなど、認知面を強化する行動も取られていた。

#### (2) 問題発生への危惧、学習の障害

このカテゴリーは、対象からの拒否への危惧や性差に起因する学習の障害を示している。「自分が男性なので嫌がらないか」、「嫌がられなかったらいいなあ」といった対象からの拒否への危惧が挙げられた。そして、過去の実習で、学生が行う清拭のような身体接触のある看護ケアを女性患者から拒否された経験や学生自身が清拭を辞退した経験を持っていた。また「女性の立場に立って男

表1 男子看護学生の母性看護実習における経験のカテゴリー

カテゴリー	サブカテゴリー(実習前)	サブカテゴリー(実習後)
1. 学習適応のための自己の取り組み・順応	1) 卒業・免許取得のための学習意欲 2) 学習適応のための他者からの情報収集	3) 自分に同調した学習ベース 4) 技術習得に対する実感
2. 問題発生への危惧、学習の障害	5) 性役割意識 6) 対象からの拒否への危惧 7) 性差に起因する学習の障害	5) 性役割意識 6) 対象からの拒否への危惧 7) 性差に起因する学習の障害
3. 環境への順応困難	8) 自己の性別への過剰意識 9) 自尊感情の低下	10) 居心地の悪さ 11) 居場所の確保
4. 男子学生であることの有益性	12) 男子学生であることの特典活用の可能への期待	12) 男子学生であることの特典活用の可能への期待
5. 自己への照合	13) 性差に起因する学習実感の無さ 14) 自分の将来の姿との照合	13) 性差に起因する学習実感の無さ 14) 自分の将来の姿との照合 15) モデルとなる看護師との出会い 16) 学生の父親疑似体験 17) 性差による子どもへの感覚の相違
6. 生命への畏怖の念		18) 生に対する喜びの実感 19) か弱いものに対する思いやり

性である自分が関わっていけるか」や「助産は女性の仕事」という性役割意識も学習意欲に影響していた。すでに終えた小児看護実習での経験から「子どもへの苦手意識」を持っていたり、女子学生とペアを組み事例を受け持つという実習方法で「やっていけるか」という予期不安を述べていた。

### (3) 環境への順応努力

このカテゴリーは実習環境での居心地の悪さの体験や居場所の確保が困難な様相および順応しようとしている努力を示している。

過去の経験から実習グループ内の女子学生と自分とを比較し「女の子(女子学生)の方ができるような気がする」、「適応が遅い」など自己の性別への過剰意識や自尊心感情の低下などを表出していた。

### (4) 男子学生であることの有益性

このカテゴリーは男子学生であることの特典活用可能性への期待を示しており、過去の実習経験から「男性の力を必要とする看護もある」ということの学びから実習への心構えを前向きにしようとしていた。

### (5) 自己への照合

このカテゴリーは実習での出来事を自分の感覚や体感、将来の自己像へ実習体験を取り込んで照合させていることを示している。

「自分に妊娠・出産の可能性がないのでイメージできない」、「実感が湧かない」といった性差に起因する学習実感のなさを述べていた。また「自分が生む立場だったら見ず知らずの人に分娩なんか見られるのは嫌だ」と女子学生同様、自己に引き寄せた経験をしていた。

## 2. 実習後の経験から抽出された6つのカテゴリー

### (1) 学習適応のための自己の取り組み・順応

学生が実習で女性の身体に触れる、搾乳をする、新生児を抱くといった母性看護特有の技術を「行えた」「慣れた」と表現し、修得できたことに対する思いを表出していた。

### (2) 問題発生への危惧、学習の障害

実習において対象からの拒否に2名の学生が遭遇し、心理的に追いつめられた体験があった。また、「悪露のことや子宮復古のことなどやはり聞きにくい」といった学習の障害が挙げられていた。

### (3) 環境への順応努力

産婦人科病棟や授乳室、産褥期の保健指導場面などで学生は居場所の確保ができず「居心地の悪い感じ、ここに居てはまずいんじゃないかな」、「廊下を歩いている時に婦人科疾患の患者からの視線を感じ、やりにくかった」

という感じや「もうちょっと男のいる場所へ行きたいな」と願う気持ちがあった。その反面、「病棟の雰囲気が和やか」、「病棟の受け入れ態勢はよく、男子学生に慣れているという感じ」、「病棟の受け持ち以外の患者が挨拶してくれる」といった経験から、実習後半は慣れてきて「あまり気にしなくなった」や「授乳室にも入っていった」、「今まで新生児の独特の匂いに違和感を持っていたが実習では感じなくなった」などの実習環境への順応状況も述べられていた。

### (4) 男子学生であることの有益性

今回の研究のための面接を「実習前後の面接があり自分の気持ちや考えを出せたことがよかった」と表現していた。

### (5) 自己への照合

「自分が帝王切開で生まれたので、その場面をみるのができた」「子どもが欲しくなった」「将来自分の子どもが生まれる時も立ち会いたい。母親が一人で苦しむのは気の毒と一緒に頑張りたい」「(自分の)子どもの誕生の瞬間を見たい」など自分の過去や将来の姿と照合していた。一方で、「出産は自分自身が産むわけじゃないのでわからないところがある」と学習実感のなさも述べていた。また、「父親って写真をとるくらいしかやることがないのかな」、「子どもを初めて見ても実感が湧かない、そんなもんかなあ」など学生が父親の疑似体験をしていたり、「女の子(女子学生)達みたい(新生児を見て)わーかわいいとは思わなかった」というように性差による子どもへの感覚の相違を表出していた。

### (6) 生命への畏怖の念

このカテゴリーは生に対する学びの実感を示している。「母親に感謝したい」や「生命の大切さ、貴重なものだとすることを実感した」や「生命が引き継がれていくんだなあということを目の当たりにして理解した」などの学びを述べていた。また新生児を「かわいい」と表現していた。

## IV. 考 察

The Face Scaleの結果より、実習前のスケールレベルに個人差が見られるものの、実習終了後の気分が実習前より快になっていた。これは、実習後の学生の経験が、学習に順応していく様、自己に照合する経験や、生の喜びの実感など実習前より positive な体験が増えていることと、一課題達成の安堵感の結果であろう。また、実習前の学生の経験から、実習へ前向きに取り組もうという意欲や対処行動とともに、性差により実習に支障をきた

すのではないかという予期的な不安が共存しており、その結果が不快の強さとなって個々に現れていると考えられる。これらのような実習前後の気分をもたらす学生の経験から得られる教育上の示唆を以下に考察する。

### 1. 身体ケアとジェンダー

Positiveな経験として、対象からの承認が男子学生にとって大きな自信と学習意欲につながっていることが伺われた。出産前後の女性は心理的にも身体的にも変化が著しい特徴を持ち、ライフサイクルの中で最も女性性が発揮される時期である。男性という性別だけで拒否的にとらえる女性患者が存在するのは事実であり、身体ケア、特に生殖器に直接触れるケアに抵抗を示す女性は多い<sup>12, 14)</sup>。ケアを受ける側にすれば、命にかかわる緊急性のある場面で男を受け入れるのは仕方がないけれど、生活の場面ではセクシュアリティの問題が優先されて、男性への抵抗感が出てくるのではないかと<sup>21)</sup>と言われている。すなわち、妊娠・出産という健康なプロセスへのケアであるという母性看護の特徴や、長い歴史を持つ助産師のイメージも男性への抵抗感を助長していると思われる。また、受け持ちの承諾を渋々行っている<sup>2)</sup>場合もあるため、男子学生が受け持ちとして関わっている間、学生と妊産褥婦の両方の反応を経験豊かな臨床スタッフや教員が察知して関わるが必要とされる。

The Face Scaleの結果で実習前後の変化が少なかった学生は、対象からの拒否に遭遇していた。このような受持事例からの「拒否」という結末の場合、あるいは臨床スタッフや教員が「受持ちを解消した方がよい」と判断される場合においては、対象のneedsすなわちインフォームド・チョイスの結果であると学生が理解でき、学生個人の存在の否定につながらないということを学生に伝えるようなフィードバックが必要と考える。つまり、対象とともに学生へのケアリングが必要とされる。

看護の実施に関しては、男子学生が女性の身体に触れ、技術修得することで学生の自信につながっている。学生の「行えた」という表現からは、多種、頻回の技術ではなく1回、1場面でも実施できたという感覚が必要であるように思われる。また「慣れる」という表現から、手技のみならず、情緒的に安定して、実施できる感覚が自信につながる。そこで、男子学生がケア提供を安心してできるよう、臨床スタッフや教員が場づくりをし、自信につなげる経験をしていくことが必要であると考察される。

看護の特徴として、看護技術の刺激は非常に小さく、生じる反応も小さく、人間関係が技術の効果に含まれる<sup>22)</sup>

ということがある。学生の関心が、自己に起こりうる事か否かにとらわれていると対象へ気持ちが向かず、人間関係を伴う技術提供が困難になることも考えられる。Travelbee<sup>23)</sup>は人間対人間の関係の確立にいたる位相において、共感とは欠くことの出来ない存在としている。「自分には妊娠・出産の可能性がないのでイメージできない」という自己へ照合させての経験は、男子学生が対象に起こっている事を他人事としてとらえ、自分自身で対象との距離を作ってしまう、共感することをあきらめてしまっていることが伺われる。実習後は、分娩見学からの経験が多く語られ、男性の立場で自己と照合させていることが示された。一方で、妊娠・出産という身体に起こる現象に関しては、自分には起こりえないことである感覚が実習前と同様に残っていた。この点に関しては、女子学生との出産場面などの受け止め方の違い<sup>3, 24)</sup>で述べているのと同様の結果であり、本調査では、男性の立場で自己と照合させていることが、新たな知見であった。今後の教育の方向性としては、自分に起こりうる可能性の有無から脱却して対象が捉えられるよう、看護やケアリングの重要な要素である共感的理解ができる教育が必要である。つまり、母性看護実習で実際に経験した場を個別に教員と共に振り返り、共感能力を高めるための感性の教育をすることである。学内ではロールプレイ等体験を重視した方法で、コミュニケーションスキルを磨き、同時に手技を行う演習が必要であろう。

### 2. 少数者としての男子学生

Kanter<sup>25)</sup>は、集団生活における比率の影響として、少数派を15%以内と定義し、少数派は多数派に比べて文化・地位・態度に違いが生じると述べている。少数派であることが業務遂行能力に影響を及ぼすとされ、男性看護師に起こる具体例も報告されている<sup>26)</sup>。産婦人科病棟は新生児を除いて、患者は全て女性であり、医療スタッフも少数の男性医師がいるのみで、学生は他領域の実習と比べさらに少数派として実習環境に存在することになる。男子学生が、女性多数の環境内で男性としての体面を保ちつつ<sup>16)</sup>実習していることは本研究でも伺われた。そのような中でケアを成功させ、自分のできた感覚と対象からのpositiveな評価が得られる関わりを通して、男子学生に対する承認を与えていくことが必要である。また、男性は女性と比べ感情表現を抑えがちである<sup>27)</sup>と言われている。

このように、病棟内に存在するだけでも感情を大きく動かしながら実習しているため、実習では環境への順応を促すためにも、男子学生の感情を表出させる教員の関

わりも重要であることが示唆された。その点では、今回の調査自体が、女子学生とは異なる待遇として受けとられるということや、面接で感情表出させているため、男子学生にアクティブに関わっている。それが研究の限界でもあるのだが、今後の実習の教授活動に含めていくことが必要とされる。

### 3. 青年期の発達課題達成途上にある男子学生

人間には多様なセクシュアリティが存在する。そして青年期のセクシュアリティは、安定かつ非可逆的な男性性・女性性の確立が発達課題である<sup>28)</sup>と言われている。また、成人初期としては、性の成熟、結婚への心的準備や子孫を生み育てるといった個人のライフスタイルを選択する課題がある<sup>29)</sup>。この時期に経験する実習は、学生自身の発達課題に直接影響する出来事となる可能性がある。本調査では、自己へ照合している結果が得られていることから、単に看護の学びに留まっていないことが推察される。

女子学生は自分の将来の問題として意識しながら学習し<sup>30)</sup>、本調査では男子学生も将来自分になるであろう父親の姿を意識していることが伺われた。臨床の場では、両親学級や夫立ち会い分娩など父性への働きかけが増えているが、産婦人科病棟や産婦人科外来という場での父親の存在は稀薄であり、かつ実習という時間的に制約がある中で父親と学生が接することはまれで、母親を通して父親を知るといった程度が現状である。臨床看護として、面会時間や面会人の制限を無くす工夫をし、家族看護を積極的に行っていくことが、男子看護学生の自己成長としての有益性を高めると予測される。しかしながら、男性看護師の有益性という観点から、男性だから期待するということを強調するのは慎重にすべきである。父性看護学の確立への提言<sup>31)</sup>もみられるが、現在の母性看護学には父性への看護の内容も含まれている。「男性だからできること、父性的な看護」を男子学生に期待するのは看護をジェンダー化することになりかねない。実際に、今回の調査でも男性を活かせる力を使うような看護もあるということを知り、学生が positive にとらえていたという結果があった。生得的に身につけている能力の活用、力仕事などを期待するのはセクシャルハラスメントともとらえられ、不快感を示している<sup>32)</sup>場合もある。これらは性別ではなく、個人の個性として期待されることとして教員や臨床スタッフが認識することが必要である。

## V. 結 語

生命が誕生する唯一の場である母性看護実習を経験す

ることの意義は大きいですが、その中で、対象となった5名の男子学生が両極の感情を伴う様々な経験をしていることが明らかになった。20世紀後半、女性の職業であった看護を人間の科学として自立させようと看護学は発展してきた。そして、看護学が性に縛られた科学から自らを解放し、人々が安定した生活の流れを保全するのを手助けする人間の科学として活動の場と方法を見出すことができる<sup>33)</sup>よう、我々は看護本来の専門性を高めることが期待されている。そして、今回の結果、1) 対象とともに学生へのケアリングを行う、2) 共感的理解を高めるための演習や実習指導、3) 男子学生の感情表出を助ける関わり、4) 臨床看護の場における家族看護の展開、5) 性別は個性ととらえる視点を臨床スタッフ、教員が持つ、を踏まえ、母性看護実習の教授-学習活動を支援し、専門性の向上につなげられるよう役立たせていきたい。

## 文 献

- 1) 看護問題研究会監修 (2002) 平成14年看護関係統計資料集. 日本看護協会出版会, 東京, p.8-12, p.63.
- 2) 福井典子, 炭原加代, 森圭子, 末原紀美代, 田中恵子 (1988) 本学における男子学生母性看護学実習の現状と課題. 大阪府立看護短期大学紀要, 10:101-110.
- 3) 藤澤洋子, 南部一子 (1981) 男子学生に対する母性看護学実習の試み. 大阪府立看護短期大学紀要, 3:93-99.
- 4) 横山孝子, 本田千浪 (1993) 男子看護学生の母性実習について, 改訂カリキュラム後の実習状況. 看護教育, 34:60-66.
- 5) 西田妙子, 高田敏恵, 北崎直美, 中橋喜美恵, 坂井恵子, 古木優子 (2001) 1人で褥婦を受け持つ実習形態へのとりくみ. 看護教育, 42:19-23.
- 6) 斎藤祥乃, 後藤幸代 (2001) 男子学生の母性看護学実習の一考察-実習内容の改善を試みての結果と課題-. 母性衛生, 42:230-241.
- 7) 納富昭子, 山本真紀子, 萩原美紀, 矢野恵子 (2001) 母性看護実習における看護学生の戸惑いとその対処行動. 三重看護学誌, 13 (2):41-51.
- 8) 西田妙子, 坂井恵子, 古木優子 (2001) 実習到達度と抵抗感等の変化. 看護教育, 42:24-29.
- 9) Callister, L.C., Garbett, D.H., Coverston, C. (2000) Gender differences in role strain in maternal/newborn nursing students. Journal of Nursing Education, 39:409-411.

- 10) Patterson, B.J. and Morin, K.H. (2002) Perceptions of the maternal-child clinical rotation: The male student nurse experience. *Journal of Nursing Education*, 41:266-272.
- 11) 本田千浪, 横山孝子 (1993) 男子看護学生の母性実習に関する調査 (第3報) - 男子看護学生の見解 -. *母性衛生*, 34:222-229.
- 12) 猪崎聖子, 串間秀子, 後藤久美子 (1995) 男子看護学生の母性看護実習の現状と課題. *看護教育*, 36:966-969.
- 13) 稲垣恵美, 林マツノ (2002) 男子学生の母性看護学実習に対する意識調査. *日本赤十字愛知短期大学紀要*, 13:61-75.
- 14) Morin K.H., Patterson B.J., Kurtz B., Bizowski B. (1999) Mothers' responses to care given by male nursing students during and after birth. *The Journal of Nursing Scholarship*, 31:83-87.
- 15) 矢原隆行 (2001) 看護教育の場におけるジェンダー構築 - 男子看護学生をめぐる状況 -. *看護教育*, 42:34-38.
- 16) 松田安弘, 舟島なをみ, 杉森みど里 (2001) 男子学生の学習経験に関する研究. *看護教育学研究*, 10:15-28.
- 17) 北林司 (2001) 海外文献にみる男子看護学生と看護士の現況. *看護教育*, 42:39-42.
- 18) 波多野梗子, 小野寺杜紀 (1992) 看護士の就業と男子看護学生の教育の現状 - K県の実態調査をとおして -. *看護展望*, 17:445-455.
- 19) 下中弘 (1995) “心理学事典”, 初版, 平凡社, 東京, p.186.
- 20) Lorish, C.D. and Maisiak, R. (1986) The Face Scale: A brief, nonverbal method for assessing patient mood. *Arthritis and Rheumatism*, 29:906-909.
- 21) 春日キスヨ (2002) ケアとジェンダー. *看護学雑誌*, 66:989-993.
- 22) 菱沼典子 (2003) 研究による実証が, 説明できる看護を築く. *日本看護科学会誌*, 23:67-73.
- 23) Travelbee, J., 長谷川浩, 藤枝知子訳 (1996) “人間対人間の看護”, 初版, 東京, 医学書院, p.173-232.
- 24) 養老孟司 (2003) “バカの壁”, 初版, 新潮社, 東京, p.13-18.
- 25) Kanter, R.M. (1977) Some effects of the proportions on group life; Skewed sex ratios and responses to token women, *American Journal of Sociology*, 82:965-990.
- 26) Scott, R.Z., 勝原裕美子訳 (1998) アメリカにおける看護士の実状. *看護*, 50:209-219.
- 27) 関智子 (1998) “男らしさ”の心理学, 第1版, 裳華房, 東京, p.66-67.
- 28) 服部祥子 (2000) “生涯人間発達論”, 第1版, 医学書院, 東京, p.81-96.
- 29) 上田礼子 (1996) “生涯人間発達学”, 第1版, 三輪書店, 東京, p.173-193.
- 30) 山内葉月 (1991) 分娩看護実習後の学生の自省とその示唆するもの. *看護教育*, 32:852-856.
- 31) 山田正己 (2002) 父性看護学確立への提言. *看護学雑誌*, 66:1018-1021.
- 32) 山崎裕二 (2002) 男性看護職の感情の歴史点描. *看護学雑誌*, 66:1012-1017.
- 33) 野島良子, 澤井信江 (2002) 成熟した看護への途. *Quality Nursing*, 8:4-8.